

哲学教育におけるエソテリシズム

—— L. シュトラウスを参照枠として ——

Esotericism in Philosophy Education: Focusing on Leo Strauss

志田絵里子（学習院大学ラーニング・サポートセンター）

【要旨】

本稿ではシュトラウスのエソテリシズムを参照しながら、現代における哲学教育の意義を探ること試みる。シュトラウスのエソテリシズムの内実を構成する議論において最も重要な論点は、哲学と社会の緊張関係、換言すれば哲学者と市民の差異である。これらは現代の哲学教育によって乗り越えられているのかについて、シュトラウスのエソテリシズムの適用可能性という観点から考察する。

The purpose of this paper is to gain a suggestion for philosophy education in modern society through investigating Esotericism in Leo Strauss. In order to accomplish this study, we focus on his a claim that there is a tension between philosophy and politics because we predict that it could appear why we should learn philosophy.

Firstly, the review of Esotericism in Strauss is introduced and I attempt to get down to specifics on Esotericism in Strauss. Secondly, we confirm a tension between philosophy and politics in reference to differences between philosopher and citizen. Taking this study, I show the similarity point between Esotericism and liberal education. Lastly, I suggest the potentiality of Esotericism in Strauss which could be a beneficial suggestion to philosophy education in modern society.

Strauss's theory on Esotericism implies the reason why we should pay attention outside through the philosophy: we can know the importance of recognizing the existence of truth. As a result, we can reconsider the existence beyond current location from the new outside in which we learn philosophy.

【キーワード】

哲学教育 エソテリシズム 哲学と社会の緊張関係 哲学者と市民 リベラル・エデュケーション

Philosophy education, Esotericism, A tension between philosophy and politics, Philosopher and Citizen, Liberal education

1 はじめに——問題の所在とシュトラウスに着目する意義

哲学のイメージは一般に、大学などの専門的な教育機関で学ばれる一般教養または、難解な学問というものであったが、近年は哲学をもっと身近に感じられるように工夫された書籍やテレビ番組が普及するなど、哲学に対する感覚が変わってきているようである。

文部科学省中央教育審議会による 2012 年の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」においては、「想定外の困難に処する判断力の源泉となるよう教養、知識、経験を積むとともに、協調性と創造性を合わせ持つことのできるような大学教育への質的転換」が提言されている [中教審 2012:7]。これも「哲学」を含む「教養」概念の社会への取り込みという趨勢の一環である。また、世界各地で哲学の授業が実施されていることを受け、山梨学院小学校で試みられた対話型の哲学の授業の研究報告 [田中・山内・鈴木 2019] にもみられるように、実践的な哲学の授業への関心も高まっている。

このように、学校において哲学教育が取り入れられている状況は、これまで社会と乖離していた哲学的な思考方法が、一般社会と融合し始めたことの現れと見ることが可能であり、哲学と社会の関係という問題を導出する。この問題に関して、小玉重夫も「専門性（秘儀性）と市民性（公共性）の間のジレンマ」と、「沈黙と対話のジレンマ」という「二つのジレンマ」があるとの的確な分析を行っている。小玉は、哲学教育には専門性の強い大学と公共性を有する学校の間で起こる軋轢というジレンマと、哲学的対話により沈黙したい子どもに発言を強制することは全体主義に通じるおそれがあるというジレンマがあると指摘する [小玉 2018]。

このような、社会との関わりにおいてジレンマをはらむ哲学教育については、哲学と社会の関係を検討することで、改めて哲学教育の意義を見出していくことが妥当ではないかと思われる。そこで、本稿では哲学と政治（社会）の間の緊張関係を主張している L.シュトラウス（Leo Strauss 1899～1973）の議論を手掛かりにして、哲学教育について考察してみたい。さらにシュトラウスの議論の中でも特に「エソテリシズム」に着目してこの検討を行う⁽¹⁾。

なぜシュトラウスによってこの検討を行うのか。哲学が一般的に普及したのは良い面があったからであり、哲学を子どもの教育にも取り入れるようになったのは、より早く教えることにメリットがあると考えられたからであろうと推測されるが、哲学の良さとはいかなるものか。これについては哲学を称揚する見解のみを拾い上げていくことで哲学の良さを強調することも可能であろう。しかしながら、上述のように哲学と社会の対立関係を主張し、哲学が普及し広く学ばれることに批判的な立場の急先鋒ともいえるシュトラウスの見解にあえて注目することで、彼によって相容れないと強調されている哲学と社会の関係性の位相を捉え直し、果たして現代社会ではこれが乗り越えられているのかを見極める契機を見出せるのではないかと考えられる。

ここで問題となるのは、そもそも大学などで専門的に学ばれる哲学と上述のような学校教育における哲学教育は、教え方や対象年齢などに大きな差異があり同様に捉えるべきではないということである。確かに厳密な学問的な分類の視点からはそうであろうが、現代社会で膨大な情報にさらされる子どもたちはこれまでにないスピードで価値判断を求められており、教育の方法論の一環として哲学教育の必要性が生まれたともいえる。そこで、

本来の哲学が有していた、社会との関係という側面が大きく影響していると考え、哲学の社会の関係性を説いているシュトラウスの議論を参照することにも妥当性があるといえる。

また、なぜシュトラウスの議論の中でも特にエソテリシズムに着目するのかといえば、哲学を全ての人が学ぶことの意義を明らかにするためである。次章でも詳述するが、エソテリシズム（秘教主義）とは、表面的には一般的に受け入れられやすい書き方によって、意図的に真理を隠すような書き方の技法である〔WIPP:230-231=245 参照〕⁽²⁾。

エソテリシズムは現代の教育に対していかなる役割を果たしうるか。日常生活において学校や社会で折り合いのつかなかった意見や、生きる上で生じる哲学的な疑問などを我々はどこに向けていけばよいのかを考えた場合、社会に一般的には普及していない思考や価値観の存在を知ることは大いに我々を勇気づけてくれる。つまり、現代のような情報社会では何もかもを容易に知りうるかに見えるが、実は哲学的思考によってのみ知りうる秘教的な議論もあるのではないか、またはそのようなエソテリシズムに支えられた議論の存在の認識を通じて、古代ギリシア哲学より連なる、本来の哲学的思考を学ぶことの意義を考えることは非常に有益なのではないかを検討する必要がある。

また、先述の小玉もシュトラウスを参照して教育学上の「政治的変革の構想」を戦後教育学の「秘儀」として抽出し、シュトラウスのエソテリシズムを考察の端緒として「秘儀」をシュトラウスの「秘教」と同様のものと解しつつ、これを超越する視点を提唱している〔小玉 2008：150〕。

このようにシュトラウスのエソテリシズムには新たな知見を得る可能性があり、学校教育における哲学教育の有意義性が注目されているまさに今こそ参照すべきである。上述の山梨学院小学校の実践においても「対話による世界観の刷新」などの効果が報告されており〔田中ほか 2019:117〕、これは大学におけるような専門的な哲学を学んだ際にも学生の実感としてよく聞かれるものであり、エソテリシズムを取り入れて当該教育を行っても同様の実効性を期待しうる。

シュトラウスのエソテリシズムについての先行研究の一部を見ておくと、著名なシュトラウス研究者で、シュトラウスのテキスト解釈の重要性に言及している飯島昇蔵は、シュトラウスのエソテリシズムの特質を精査したうえで、エソテリシズムには「自由な知的研究と教育」が担うべき「社会的責任」という問題が中核にあることを指摘している〔飯島 1990：46,62〕。L.ランパートは、エソテリックな哲学者はエソテリックに書こうとするのかという問題を取り上げ、シュトラウスのエソテリシズムを「啓蒙の終わりに対する啓示のオールタナティブ」と見ている〔Lampert 2009：90〕。

このように、シュトラウスのエソテリシズムは単に技法として存在しているのではなく、教育を通じて社会の思想的転換にまで至るような多大なる影響力や責任まで内包するものである。つまり、エソテリシズムを参照した哲学教育により、未来を担う子ども、特に迅速な価値判断にさらされている現代の子どもの考え方の選択肢を増やすことにも寄与する。

これらを踏まえて、本稿ではシュトラウスのエソテリシズムを手掛かりに、哲学教育の意義を探ることを試みる。まずシュトラウスのエソテリシズムを概観したのち、シュトラウスが主張する哲学と社会の間隙について、哲学者と一般の市民との差異を中心として検討し、シュトラウスのエソテリシズムの現代の哲学教育への適用可能性と限界について述べる。

2 シュトラウスのエソテリシズム——見えない知識を探り出す

シュトラウスによれば、エソテリシズムとは次のような著述の方法のことであり、これに則った書物においては意図的に、著者の真意が看過されるような書かれ方がなされている。

ある著者が、他のすべての場所ではその主題について反対のことを断言したり沈黙を保ったりするにもかかわらず、非常に重要な主題について1度だけ言明するなら、その著者の研究者たちは、その著者の教説を呈示するに際して、その特異な言明をつねに必ず無視するものだろうことに、わたくしは1度ならず注意を向けてきた：その特異な陳述は非知性的なものであるか、あるいは重要でないものとして等閑視されるのである。[WIPP:230-231= 245]

よって、端的にいえばエソテリシズムとは、ある言明において、意図的に真実を隠すために直接的には真実については述べないようにして他の言い方に変えたり、または全く述べないようにするという著述の方法論のことである。

なぜ真実を隠さなければならなかったのか。自由に発言することが当然のこととされる現代の我々には実感としてわかりかねる部分が多いが、古代から中世にかけては真実を述べることで迫害されるという社会状況があった。この迫害によって真実を隠して記述するための「独特の著述の技法」が生まれた [PAW:25=187]。隠された真実、換言すると秘教的な真理を知るべきであるのは「真の意味で自由に思考することのできる」、「信頼のおける知性ある読者」に限られ、「無思慮な人々は不注意な読者でありただ思慮深い人々だけが注意深い読者である、という公理」の存在がシュトラウスによって主張されている

[PAW:23-25=186-187]。

なぜ「真理」は少数者にのみ開示されなければならないのか。これは上述の飯島が指摘しているように、エソテリシズムが含意する「教育的効果」[飯島 1990:58]に関わる。シュトラウスは「賢者たちに真理を隠すように仕向ける諸根拠を、隠しながら明らかにした最後の著述家」である哲学者レッシング [RCPR:64=114] の例を挙げ、「絶対的な真理へ至る道」[RCPR:71=121] がいかなるものであるかについて述べている。レッシングは、「初学者の道徳性と哲学者の道徳性」の根本的な差異について、実際上の政治に潜む「相対的な真理」との決別の必要性を痛感することで、「絶対的に最善の市民的制度でさえ必ず不完全」であるとする見解に到達したとされている [RCPR:68-71=119-121]。

すなわち、シュトラウスのエソテリシズムの立脚点は、政治や社会に蔓延する一般的な教説に隠された「真理」を認識するため、まず「哲学者」とそうではない者の差異に気づいた上で哲学的な考察を深めることが要求されるという点にあったのである。シュトラウスが「賢者」と「民衆」との間に横たわる深淵は、民衆教育の進歩などによって影響されることのない、人間本性の根本的事実」であり、「哲学」が「少数者の特権」と述べる通り [PAW:34-193]、哲学的考察が可能な者は少数に留まる。哲学的考察の方法は、シュトラウスによれば「古典の詳細な研究こそ、勤勉で思考する人間が哲学者になりうる唯一の方法」 [RCPR:71=122] であるとされており、エソテリシズムを実践したプラトンなどによる古

典の読解に限られる。それでは、古典を読むことをいかにして推奨するのか。

シュトラウスは、エソテリシズムによって著された書物における「理解し難い計画、矛盾、偽名、以前の言説の不正確な繰り返し、奇妙な表現等々」などの「表徴」が、「注意深い」読み手を「目覚めさせる躓きの石としての役割を演じる」と述べる [PAW:36=194]。よって「エソテリシズム」によって隠されているという「真理」の存在態様自体が、哲学的な素養を持つ人々の知的な営為を促進する。すなわちエソテリシズムは、隠れているかもしれない「真理」を見つけよというのではなく、追求せざるを得ない「真理」が隠されざるを得なかったことを認識することの延長上に「真理」の追求という哲学的な営みがあるのであるということに少数者に気づかせるという作用を含意しているのである。エソテリシズムによって著された書物の研究を通じて、「潜在的な哲学者たち」は「実践的で政治的なあらゆる目的にとって不可欠な通俗的見解から、まったく純粋に理論的な真理へと導かれて行く」のである [PAW:36=194]。

ここまで述べてきたことは、あくまでシュトラウスによる解釈を通じた、古代から連なる厳密な哲学的思考に関わるものであり「古典を読む」といった現実的な学校教育と乖離した議論に行き着いたかにみえる。しかし、かつて迫害される危険性のある中で人々が難解な著述方法を用いてまで伝えたかった真理の存在とこれを読み解くための厳しい学問的な鍛錬の重要性、これらがシュトラウスによって既述のような教育的営為に位置づけられているという事実を看過すべきではない。

さらに、かつては古典を読むということによって真理に近づくということが推奨されていたが、これを現代の学校教育において実践されている「対話」という形式に読み替えることも十分可能といえる。先述した山梨学院小学校の実践においても、対話を通じて「世界観が更新」されたり「問いの視座・精度」が変化しており [田中ほか 2019:117]、これまで古典を通じて行われてきたように、物事をより広く深く知るための契機として哲学的な「対話」がかつての「古典」のように機能しているからである。

3 哲学者と市民の差異——知識の種類は誰もが乗り越えられる

前章で述べたような、真理を隠しつつ真理に気づかせるという教育的効果を含意するエソテリシズムの根拠となっているのは、公教的教説と秘教的教説の区別である。シュトラウスによれば、公教的教説とは「政治的社会にとっては有益であるが、しかし偽りである言明」のことであり、プラトンの「高貴なる嘘」と同義である [RCPR:69=119]。これに対して秘教的教説とは「真理の知と真理の教え」のことであり、「社会の要求」と緊張関係にあるとされる [WIPP:222=236]。

つまり、公教的教説と秘教的教説の区別は、「哲学と社会の間の不均衡」 [LAM:14=22 参照] に起因する。シュトラウスは古代から近代まで実際に存在した、ソクラテスやルソーに対する思想内容に基づく社会的な迫害の例を挙げ [PAW:32-33=192]、「社会の現環境が必然的に意見である、すなわち、意見への同意であるとしたら、哲学と政治との間には必然的に対立が存在する」と述べる [WIPP:229=243]。要するに、社会に普及している「意見」はそれ自体では到底真理といえるものではなく、シュトラウスの主張する「最善の体制」の実現には寄与しないため、「意見」に留まる社会と、真理を探究する哲学とは根本的

に相容れないのである。さらに、シュトラウスの述べるところによれば、真理を探求する哲学は「社会が息づくまにそのエレメントを解体せんとする試み」であり、「社会を危険にさらす」[WIPP:221=235]からである。

さらにいえば、このような哲学と社会の対立は、次のようにシュトラウスが述べているように哲学者と市民の差異に基づく。

都市の目指すところは、哲学の目指すところと同じではない。〈中略〉哲学者と非哲学者とが真に共通した考えを持つことはありえないのである。哲学と都市のあいだには根本的な不均衡が存しているのである。[LAM:14=22]

シュトラウスは「哲学者とは、本性的に最善であるとともに教育によっても最善である」と解される人たち」であり、「最も高度な種類の知識」を体得しているとも述べて

[LAM:14=22]、哲学者が最善と考えるものは市民によるそれとは異なっていると主張している。このような哲学者と市民との差異は、シュトラウスによる「知恵が勇気や正義よりも捕らえどころのない」という指摘や、「賢い人びとへの不信は、知恵の理解の欠如から生じるために、俗衆に、また僭主たちや僭主でない者たちにも特徴的」[OT:131=42]という記述にも表れている。市民は、賢人といわれる「哲学者」を恐れ、十分に理解できないている。シュトラウスによれば、哲学者と市民はそれぞれ目指している「知恵」の種類が異なるのである。「哲学者」は「自己充足的な知恵と同一である、真の徳」を目指すのに対し、「政治家」つまり市民は「富と名誉を目的とする、人々に共通の徳もしくは政治的な徳」を目指しているのである [OT:101=230]。

さらに、シュトラウスは「哲学的政治と、最善の政治体制の設立に貢献するために哲学者がなしたりなさなかつたりする努力とのあいだには、なんの必然的連関も存しない」と述べ [OT:205=454]、哲学と政治（社会）との関係についての問題は「解決不可能」であるとしている [OT:208=460]。つまり、哲学と政治（社会）は、哲学者と市民の根本的な差異に基づいて本質的に対立しており、一元的な理論体系の中に回収することはできないのである。

しかしここで疑問が生ずる。市民の側の目指すものについて、これをそのまま哲学と無関係であるとして放置しておいてよいのであろうか。一般的な社会での富や名誉のほかに哲学的な「真の徳」について市民が考えることは不可能なのであろうか。現在の状況に置き換えていえば、子どもはそのようなことについて考えないと断言できるのであろうか。

ここで注目すべきは、D.R.ヴィラが H.アレントとシュトラウスの哲学と政治の関係について、両者の議論の差異を踏まえつつ、交差する側面を次のように指摘していることである。

私の目的は、二人のいずれもが、「哲学者—市民」という人物像によって、「理論と実践」の統合を追求したと示唆することでもない。むしろ私が示したいのは、アレントとシュトラウスは、「政治」と「哲学」に対する二人の正反対の忠誠にもかかわらず、批判的で距離を置いた市民という際立った様相—私が他のところで「疎隔された市民」と呼んだもの—を明示化するのに貢献しているということである。[ヴィラ

2004:240]

このようにヴィラは、アレントとシュトラウスにおける、哲学と社会の緊張という議論が、哲学を学ぶ側の市民という存在を浮き彫りにし、彼らについて考える契機を生み出したということを指摘している。この指摘は、哲学者と異なった考え方をする市民が哲学を学ぶことで、より良い生き方に近づく可能性も高まるのではないかを考える必要性に通ずると思われる。ヴィラの述べるような「疎隔された市民」の中に、専門的な哲学の場をあまり提供されてこなかった子どもたちも含めて考えることが可能である。

よって、シュトラウスのように哲学者と市民の差異に依拠して市民の側の可能性に触れないことは学問上の厳密な研究においては必要であろうが、現在の学校における哲学教育では、哲学者と市民の区別の概念を貫くことよりも必要に応じて緩和することが枢要と思われる。

また前章で述べたように、エソテリシズムには、シュトラウスが「教育こそ、いかにして抑圧的ではない秩序を放恣的ではない自由と和解させるか」という、常に我々に突きつけられている問い、この優れて政治的な問いに対する、唯一の答えなのである」と述べるように [PAW:37=195]、真理の存在の示唆のみならず、真理に向かう哲学的探求という知的営為を鼓舞するという教育的な作用がある。

そこで、エソテリシズムによって哲学への欲求を促進されはしたが、哲学への近づき方をまだ知らない人々——哲学者ではない市民——を、適切な哲学的思考の方法へと導くための教育が必要になる。具体的にいかなる教育が必要であるのかについては、シュトラウスの教育論である「哲学の準備」としての「リベラル・エデュケーション」[LAM:13=21] についての議論を見る必要がある。

シュトラウスによれば、「リベラル・エデュケーション」とは「完全な貴紳的教養、人間的卓越性へ向けての教育」である [LAM:6=9]。具体的な内容は、目指すべき「人間的卓越性」の範型となる「最も偉大な精神が後世に残した偉大な書物」を「しかるべき注意を払って研究すること」[LAM:3=4] である。「偉大な書物」を読むことが「哲学」の準備とされているのは、これにより「哲学」が目指すべき「精神の気高さ」や「人間の真の根拠」を知るように促される [LAM:8=13] からである。

最も偉大な精神の持ち主たちと恒常的に交わることを旨とする^{リベラル・エデュケーション}一般教養教育は、謙遜とは言わぬまでも、最も高度な慎み深さを鍛え上げるものである。それは同時に、大胆さを鍛え上げるものである。〈中略〉それは、一般に受け入れられている見解をたんなる意見と見なすような決断のうちに暗示される大胆さ、あるいは、標準的な意見を、少なくとも最も奇妙で一般的でない意見と取り違えられそうな極端な意見と見なす決断のうちに暗示される大胆さを、われわれに要求するのである。[LAM:8=12-13
ルビは訳者]

リベラル・エデュケーションは、我々に対してより高次の「完全性」に近接する精神の存在を認識させ、これに向かおうとする「慎み深く」も「大胆」な知的活動を活性化する。そうだとすると、リベラル・エデュケーションが人間を哲学に向かわせる教育的役割と、

エソテリズムが人間を真理に向かわせる教育的役割とは類似している。「古典」を「対話」に読み替えて哲学教育に取り入れることが可能なことも既に述べた。

さらに、シュトラウスが「われわれは、哲学者であることはできないけれども、哲学を愛することはできる。われわれは哲学しようと試みることはできる」と述べるように

[LAM:7=10]、彼の教育論においては、現前している事象や価値観の外部へ向けた「試み」自体を鼓舞することの重要性が強調されているといえる。

つまり、リベラル・エデュケーションに類似したエソテリズムの理解を通じて、哲学者でなくても哲学的思考を試みようとしたり、哲学に近づいてみようと考えたりすることで、既に有意義な第一歩が踏み出されているのである。これを現在の学校における哲学教育に当てはめてみると、子どもが身の回りのことなどで思い悩んだ際に、知ってほしい真実が存在していること、知識にも種類があること、答えが一つでないことを知ってほしい、そのための方途として学校での哲学教育において教師たちがエソテリズムの観点を取り入れて、新たな価値観への誘いの契機としての「対話」などの試みを行うことが可能である。

4 おわりに——エソテリズムの適用可能性と限界

これまで、現代の哲学教育におけるエソテリズムの適用可能性について、シュトラウスの議論を参照しながら検討したことにより、二つのことが明らかになった。一つ目はシュトラウスの「エソテリズム」に備わる、哲学と社会の対立関係に基づく「秘教的」な「真理」の存在という示唆が現代にも有用であることであり、子どもを含め、誰もが哲学を学ぶことで新たな世界に触れる可能性が増大するということである。二つ目は新たな価値観の存在という「真理」に向かわせる哲学的探求の促進という教育的作用の点で、シュトラウスのリベラル・エデュケーションとエソテリズムが共通していることである。

これを学校の哲学教育に適用してみると、まず、一つ目の哲学と社会の緊張関係から導出されるエソテリズムによる真理の示唆については、現在多くの人々が社会における様々な苦悩を哲学的思考または対話や哲学教育によって解決しようとしているという実際の状況から部分的には既に現実化しており、学校の哲学教育によってさらなる充実が期待される。先述の山梨学院小学校の実践においても「対話」を通じて「対話による世界観の更新」や「答えの時代性・多様性」の効果が指摘されており [田中ほか 2019:117]、本稿で検討してきた、隠されている他の真実を探り出すというエソテリズムが適用可能な事例であるといえる。

すなわち、社会において行われている合理的な政策のみでは、人間の心の充足が得られないことが多く、さらなる知的な営みを求めたりすることは我々の誰もが体験していることである。よって、シュトラウスのエソテリズムによる真理の示唆は現代の哲学教育においても大いに参照すべきことであるといえる。つまり、現在自分が置かれている状況以外にも世界があり、そのような世界について思考することは我々の知的な営みに柔軟な広がりをもたらしてくれるのであり、エソテリズムを取り入れた哲学教育によって、隠されている多様な世界観という真理に近づく可能性が開かれる。このような可能性の認識を促すためにも、まずは真理の存在に気づくという姿勢がなぜ大切なのかを哲学教育におい

て行うべきであり、シュトラウスのエソテリシズムは非常に有意義であるといえる。

次に、二つ目のエソテリシズムの教育的作用という点であるが、これを現代の哲学教育にそのまま適用することには次のような限界があると思われる。

そもそもシュトラウスは、哲学と社会の緊張関係に基づき、社会で一般的に広まる言説（公教的教説）と隠された真理（秘教的教説）を厳格に区別しており、哲学者と市民の差異を強調して哲学的素養のある者に限定して哲学的探究を推奨していた。このような哲学の対象者の限定は、哲学が内包するアプリアリナ真理という概念をより先鋭化させ、知的活動を求める者たちを最も高度な探求活動へと誘うという点で確かに効果的な側面もある。

しかしながら、現代のようなグローバル化が進んだ情報社会では、誰もが自由に情報にアクセスできるということの利点にも着目すべきである。つまり、誰かが投げかけた疑問や意見に対して比較的迅速に外部からの応答が可能であり、このようなやり取りを通じて当該問題に隠されている他の問題に気づくこともできる。現代は隠された価値基準の発見が容易に行われうる環境にあるということである。

このことは、エソテリシズムの構造を認識した対話という基盤を学校の哲学教育に取り入れて実践することで、さらなる奥行きを持たせることができる。先述の山梨学院小学校の実践において「問いの視座・精度」や「答えの時代性・多様性」という実感を子どもたちが持つことができたとの効果が報告されている〔田中ほか 2019:117-118〕ことから、このような対話の実践の際に、シュトラウスのエソテリシズムをそのまま適用して知識の種類や性質の差異をあらかじめ限定し、その難解さによって子どもを遠ざけるのではなく、先入観のないすべての子どもに参加してもらい、「対話」のなかで気づいてもらうようにすべきということが明らかである。

よって、シュトラウスのエソテリシズムの教育的作用をそのまま適用して、エソテリシズムを支える理論的根拠である哲学者と市民の差異を厳格に行い、哲学教育の対象者を哲学的思考にふさわしい能力と姿勢のある少数者に限定することには限界がある。

このように、学校の哲学教育に対するシュトラウスのエソテリシズムの適用可能性については、多様な価値観の存在を示唆するという側面は推奨されるべきであるが、より広く子どもたちに哲学的な対話の機会を保障するために、対象者の限定という点については適用に限界があることが明らかになった。しかし、今後の課題として、シュトラウスが哲学と社会の間の緊張関係は解決できないと判断していることについて、エソテリシズムによる真理の示唆の根底には、哲学と社会が対立せざるを得ない必然的な哲学的状況があることにも意識を向けていくことが挙げられる。

【註】

- (1) シュトラウスの主要な先行研究は、政治哲学の観点からの研究（〔Drury 1997〕、〔Zuckert 2006〕、〔飯島 1995〕、〔石崎 2007〕、〔添谷 1992〕、〔富沢 1987〕、〔藤原 2007〕）、神学政治問題の観点からの研究（〔Tanguay 2011〕、〔柴田 2009〕、〔マイアー 2012〕）、古典論の観点からの研究〔藤本 2012〕があり、共有されている問題意識は大まかに捉えると、シュトラウス哲学の射程が「古代ギリシア哲学」への回帰なのか、新たな価値形成への布石なのか探り出したいというものである。
- (2) A.フェーヴルによればエソテリシズムとは一般に「秘密」や「特定の者だけ許される知識」、「しるべきテクニク」によって到達すべき霊的な場である〔フェーヴル 1995: 8-9〕。エソテリシ

ズム発達の背景には、古代から中世のヨーロッパにおいて、宗教的または政治的な規制により自由に真理を述べる事ができないという社会状況に加え、そもそも哲学上の真理を一般社会に向けて発信していくこと自体に問題があるという哲学史上で周知の思想的基盤がある。

【参考文献】

* Leo Strauss の著作

(シュトラウスからの引用は以下の略号に従う。OT 訳書の頁表記は上下巻を通したものを使用。引用部分の傍点やルビ、括弧等は訳者)

LAM: *Liberalism, Ancient and Modern*, Chicago: University of Chicago Press, 1968. (=石崎嘉彦・飯島昇藏訳者代表『リベラリズム——古代と近代』ナカニシヤ出版、2006.)

NRH: *Natural Right and History*, Chicago: University of Chicago Press, 1953. (=塚崎智・石崎嘉彦訳『自然権と歴史』、筑摩書房、2013.)

OT: *On Tyranny: Including the Strauss-Kojève Correspondence*, Gourevitch, V. ed, Chicago: University of Chicago Press, 2000. (=石崎嘉彦・飯島昇藏・面一也訳『僭主政治について』(上・下)現代思潮新社、2006.)

PAW: *Persecution and the Art of Writing*, Chicago: University of Chicago Press, 1988. (=「迫害と著述の技法」(第2章のみ)石崎嘉彦訳、『現代思想』Vol. 21-14、青土社、1996年、pp. 185-197.)

RCPR: *The Rebirth of Classical Political Rationalism: An Introduction to the Thought of Leo Strauss: Essays and Lectures*, selected and introduced by Pangle, T. L. Chicago: University of Chicago Press, 1989. (=石崎嘉彦監訳『古典的政治的合理主義の再生——レオ・シュトラウス思想入門』、ナカニシヤ出版、1996.)

TWM: “The Three Waves of Modernity”, in *An Introduction to Political Philosophy: Ten Essays*, Giddin. H. ed. Detroit: Wayne State University Press, 1989, pp. 81-98. (=石崎嘉彦訳「近代性の三つの波」『政治哲学』創刊号、政治哲学研究会、2002、pp. 3-21.)

WIPP: *What is Political Philosophy?: and other studies*, Chicago: University of Chicago Press, 1988. (=飯島昇藏・石崎嘉彦他訳『政治哲学とは何であるか?とその他の諸研究』早稲田大学出版部、2014.)

* 他の文献

Drury, S. B. (1997) *Leo Strauss and the American Right*, London: Basingstoke.

Lampert, L (2009) “Strauss’s Recovery of Esotericism” in *The Cambridge companion to Leo Strauss* S. B. Smith ed, New York: Cambridge University Press, pp.63-92.

Tanguay, D. (2011) Nadon, C. trans, *Leo Strauss: An Intellectual Biography*, New Haven and London: Yale University Press.

Zuckert, C. & Zuckert, M. (2006) *The Truth about Leo Strauss: Political Philosophy and American Democracy*, Chicago: University of Chicago Press.

飯島昇藏 (1990) 「レオ・シュトラウス——テキスト解釈の課題と方法」小笠原弘親・飯島昇藏編『政治思想史の方法』早稲田大学出版部、pp. 45-83.

- (1995)「シュトラウス——政治哲学の復権」藤原保信・飯島昇藏編『西洋政治思想史・II』新評論、pp.217-233.
- 石崎嘉彦 (2009)『倫理学としての政治哲学——ひとつのレオ・シュトラウス政治哲学論』ナカニシヤ出版。
- ヴィラ, D.R.(2004)『政治・哲学・恐怖——ハンナ・アレントの思想』伊藤誓・磯山甚一訳、法政大学出版局。
- 小玉重夫(1999)『教育改革と公共性——ボウルズ＝ギンタスからハンナ・アレントへ』東京大学出版会。
- (2008)「教育学における公儀と秘儀」『教育哲学研究』第 97 号、教育哲学会、pp. 149-150.
- (2018)「学校で哲学プラクティスを行うことのジレンマと可能性」日本哲学プラクティス学会第 1 回大会発表資料 (2018/8/26) 於：明治大学和泉キャンパス、
https://researchmap.jp/mu5q13nio-1779165/#_1779165、2019/12/4 閲覧。
- 柴田寿子(2009)『リベラル・デモクラシーと神権政治——スピノザからレオ・シュトラウスまで』東京大学出版会。
- 添谷育志(1992a)「L. シュトラウスと A. ブルームの「リベラル・エデュケーション」論」『法學』第 55 号(6)、pp. 188-212.
- (1992b)「新旧論・ノート——レオ・シュトラウスの政治思想をめぐる断章」小野紀明執筆者代表『モダンとポスト・モダン』木鐸社、pp. 79-115.
- 田中智志・山内紀幸・鈴木崇(2019)「子どもとの哲学対話——Philosophy for / with Children」『教育学哲学研究』119 号教育哲学会 pp. 112-118.
- 富沢克(1987)「レオ・シュトラウスと近代性の危機——自由主義的理性批判序説(1)」『同志社法学』第 200 号記念論集、同志社法学会、pp. 389-432.
- 沼田裕之・安西和・増淵幸・加藤守通 (1996)『教養の復権』東進堂。
- フェーヴル, A.(1995)『エゾテリズム思想：西洋隠秘学の系譜』田中義廣訳、白水社。
- 藤原保信(2007)『藤原保信著作集 第 7 卷 政治哲学の復権』新評論。
- 藤本夕衣(2012)『古典を失った大学：近代性の危機と教養の行方』NTT 出版。
- マイアー, H. (2012)『レオ・シュトラウスと神学-政治問題』石崎嘉彦、飯島昇藏、太田義器訳、晃洋書房。
- 松浦良充 (2013)「脱・機能主義の大学像の構築に向けて」森田尚人・森田伸子編著『教育思想史で読む現代教育』、勁草書房 pp. 56-75.
- 文部科学省中央教育審議会 (2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて——生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (答申)」